

『民衆娯楽の実際研究（大阪市の民衆娯楽調査）』

大林宗嗣 [著]

大原社会問題研究所刊／1922年／四六判／例言・目次12頁、本文380頁、付録45頁／
図書番号OE-0073

本書は、わが国で最初にセツルメントの研究を体系的に行った大林宗嗣が、大阪市内の「諸興行的娯楽」を調査したものである。構成は「第一編 緒論」と、1920（大正9）年に実施した実態調査である「第二編 調査研究」から成る。

第一編「第一章 娯楽の理論的研究」では、作業、睡眠、娯楽が常に均衡を保った生活を理想とする。しかし、十分な睡眠や娯楽をとれない者が多く、心身の均衡を保つには娯楽の主要部分である遊戯が「極めて必要な生活要素」だとする。

「第二章 娯楽の語義」では、娯楽の語義はラテン語の「Recreatio」であり、英語の<to create anew>の意味だとする。しかし<Amusement（娯楽）>など20ほどの意味も含み、定義は「極めて困難」とする。

「第三章 娯楽の意義」では、娯楽は「人間の本能及び感情に其の根柢を有し」、本能的動作に快感が伴っている間は動作を持続できるが、それが「不快感」に変われば「休憩又は娯楽に依って精力をクリエート」する必要があるとする。

「第四章 娯楽の起源」と「第五章 娯楽の分化」では、娯楽を、「生存の必然的条件」である休養や睡眠と、「生活的要素」の遊戯や歡樂（道楽）に分け、快楽だけを独立させて楽しむことは「娯楽の分化であり、一段の進化」だとする。

「第六章 娯楽の種類」「第七章 娯楽の分類の標準」「第八章 娯楽の分類」では、娯楽の種類の多様さと標準化の困難により娯楽の分類は至難とする。そこで、娯楽の中で最も数多い「営利的娯楽を以て研究資料」として調査研究に入る。

第二編「第九章 大阪市の娯楽施設」では、市内東、西、北、南区の興行数や収益、入場者数を分析し、民衆にもっとも愛されている娯楽は「演劇及び活動写真」と結論する。

「第十章 娯楽地域の研究」では、興行施設が集中する道頓堀千日前、新世界、松島及び茨住吉、天満天神の特色を述べる。なかでも興行界の霸を称える道頓堀千日前は「第一流の客筋」を引くとして、浪花座ほか五座や花月亭などの状況を概説する。また、安価な遊興施設が集中する新世界を「市内第二の民衆娯楽地域」とする。

「第十一章 大阪市に於ける各興行物の研究」では各興行物の特性を述べる。特に活動写真については、単なる娯楽に留まらず「民衆教化の機関」として居ながらにして「世界の人情風俗」にふれられ、民衆の生活に密着しているとする。

「第十二章 大阪市学童と諸興行の関係」では、アンケート調査に基づく学童の諸興行観覧状況を述べる。ここでも著者は、活動写真が生徒の印象に入り易いため教育的効果が高いと指摘する。

「第十三章 民衆娯楽としての諸興行」では、民衆娯楽の中心は演劇及び活動写真とする。また、欧米では芸術を利用した「社会経済策」が進んでいるとし、わが国の娯楽発展のためには、民衆が生活の理想を表現し得るチャンスと環境が必要とする。具体的には野天劇場、公園劇場、隣保劇場等により「公共的娯楽の発生と発達とを図」ることだと結ぶ。

「付録」として諸興行に関する法規や、海外の活動写真取締事例を掲載する。

（柳原裕彦・市政専門図書館司書課長）